

## 正岡子規と赤木格堂

—子規生前までの年譜を中心に—

柴田 奈美

(要旨)

赤木格堂が正岡子規に認められ、子規の生前中に活躍した時期は、明治三十二年から同三十五年の前半までで、非常に短い。しかし、この短期間のうちに才能を認められ、「日本附録週報」の代選まで任せられる程の信用を得た。のちに、「ホトトギス」や「俳星」、「洪柿」といった俳誌にかかわっていく格堂であるが、この一年半という短いながらも親しく深い子規との交流が、他の「ホトトギス」の俳人に認められていたからこそ、そのことが可能になったのである。

(キーワード)

赤木格堂・正岡子規・格堂年譜・明治三十五年

はじめに

赤木格堂は、正岡子規の晩年に歌人平賀元義を紹介し、子規の短歌革新のための一助をなしたという点で有名である。しかし、格堂自身についての研究は、その知名度の割にはほとんどなされていない状況である。

本研究では、さまざまな資料から格堂の動静を調査し、可能な限り

「年譜」の形で整理した。対象とした資料は、「子規全集」(講談社版)、「日本及日本人」(昭和三年九月)など、比較的入手しやすい全集や雑誌も含め、限られた図書館での閲覧によって知るしかないものもある。誌面を割いてしまうが、後の研究のために、年譜の事項の出典を記していくことにした。

こうして作成した年譜をもとに、子規との関係を具体的に明らかにしていくことを目的とする。

### 一 赤木格堂の年譜(明治三十五年までを中心に)

明治二二年七月二七日

児島郡小串村(現岡山市小串)に赤木徳太郎、松野の四男として生まれた。(兄三人とも夭折し、正嫡の位置にあった) 本名亀

一。

父がインテリで、新聞「日本」の読者であり、子規の文章には親しんでいた(岡長平『赤木亀一』昭和三七年六月 出版社不明 一〜二頁)。

明治二六年

銚立小学校卒業、関谷巖に学ぶ。但し、格堂は「明治二六年春から、郷里を

明治二九年六月

七月五日

離れて、同三六年夏迄まる十箇年間、学生生活を続けて居たのである」と述べている（「平賀元義発見譚（一）」「吉備びと」昭和三年一月）。

明治三十三年一月

九月三日

発見譚（一）「吉備びと」昭和三年一月）。根岸子規庵歌会歌稿に初めて名前が見える。「この三回目から出席した」（「先師の晩年」「日本及日本人」昭和三年九月）

明治三〇年

九月

早稲田専門学校英語専修科入学。早稲田専門学校英語専修科卒業。文学部英語学科に入学。

四月二九日

格堂が子規を誘って左千夫を訪ねる。左千夫が留守のため、亀戸天神に詣でる（「亀戸まで」「日本」五月一七日、短歌「藤花」を「日本」五月一日に掲載。室岡和子『子規山脈の人々』花神社一九八五年六月二四二頁）。

明治三二年

明治三二年一月

「ホトトギス」十一月号に「罪を得て箱根を駕の寒さ哉」（募集俳句、鳴雪選「駕」の題）が三等で載る。その後継続してその他の選者の選に入選。

四月三〇日

「日本」の「第三回募集短歌に就きて」に「選抜の比例の多き者を挙げれば岡麓氏（東京）の歌三十首にして十六首を抜ける、（中略）格堂氏（東京）の歌三十首にして十五首を抜けるが如き最なる者なり」とある（『子規全集 第七巻』四五四頁）。

三月

「ホトトギス」三月号に初めて子規の選に入った「招く手の五階の上に霞みけり」が載る（「手」の題）。

四月二五日

六月二二日

虚子庵例会に参加。その後継続して参加。三五年五月号まで「東京俳句界」に名前が見える。

五月

初めて子規を根岸の病床に訪ねる（「格堂先生の略歴」「俳星」昭和二四年二月 三頁）。

七月二四日

根岸子規庵歌会第一回目出席。但し歌稿には名前は見られない（赤木格堂「平賀元義

六月二〇日

「大帝国」（一二号）に酒（五首）格堂、笠（五首）竹の里人、朝鬼夕鬼（七首）左

国力ニ歌ヲ出ストテオノガ歌バカリ

ナ出ダシ歌ハヨクトモ

（『子規全集 第一九巻』五一七頁）

ヒマナ時ニ来

国力ノ歌ノ事ニ就キ話アリ学校学課

子規の格堂宛葉書に次の二首を詠んでいる。

六月二日

千夫の三人が名を連ねている。この頃から選を格堂に一任されたのではないか。以後頻りに格堂の名が見える（室岡和子『子規山脈の人々』二二六頁）。しかし、「俳星」（明治三十三年八月 六号）には「大帝国」の受持ちは佐藤紅緑とある（二九頁）。

子規の格堂宛葉書に「明二十二日若シ御閑ナラバ募集歌ノ清書ニ御出掛ケ被下マジクヤ」とある（『子規全集 第一九卷』五二〇頁）。

六月三日

「国力」（一一号）には、竹の里人、節、格堂の三人がそれぞれ一〇首掲載されている（室岡和子『子規山脈の人々』二二七頁）。

六月三〇日

「国力」（一二号）からは表紙の目次にも格堂と刷り込んでいる（室岡和子『子規山脈の人々』二二七頁）。

「俳星」（明治三十三年八月 六号）には「国力」の選者は、俳句・短歌共格堂とある（二九頁）。

八月

赤木格堂「平賀元義発見譚（一）」（『吉備びと』昭和三年一〇月）に、平賀元義の歌の発見についてのいきさつが詳しく述べてある。

富士に登って歌を作ってから帰郷する予定が、急用ができ、すぐに帰郷しなければならなくなった。送別の歌を左千夫、竹の里人が寄せ、格堂は「答左千夫戯作歌」を作る（『日本』八月五日 『子規全集 第七卷』四七七頁〜四七八頁）。

八月二〇日

帰郷後三、四日経た頃、根岸短歌会の同人新免一五坊から「恋の平賀元義」が山陽新報に掲載されていることを知らされる。祖父からもいろいろ聞き入手方法も教えて貰った。切り抜きと手紙を子規に送る。

「どうです、驚いたでせう、遺詠は大分あるらしいから、明日から一生懸命集めます。早く新聞で発表して下さい。さうすれば歌を探しやすいから」という内容。

子規、格堂宛葉書に朝咯血したこと、元義の歌を集めよという指示、新聞に出したいことを書いて送る（『子規全集 第一九卷』五四一頁）。

九月

一切の元義の材料を携え上京。直ちに根岸の草庵を訪ねた。

平賀元義が子規のグループの中で最大の話題となる。森田義郎に話した内容が筆記され「心の華」に掲載された（赤木格堂「平賀元義発見譚（二）」『吉備びと』昭和三年一月）。

十月二日

子規、格堂からの手紙への返信（『子規全集 第一九卷』五六〇頁）。

萩の歌を「大帝国」に送ったこと。

俳句を短歌に翻案してほしいことなど。「備前小串局」とある。再び帰郷したか。

子規の病状が悪くなり、纏まった文章が書けなくなった。格堂が行く度に元義の評論起稿を促すが、今に々と答えつつ病勢は良くなる（赤木格堂「平賀元義発見譚（三）」『吉備びと』昭和三年一月）。

十月頃

明治三四年一月一日

見譚(二)「吉備びと」昭和三年(一月)。  
竹の里人より年賀葉書。相模葉山真名瀬  
鈴木ミチ方

賀正

枕べノ寒暖計ニ新玉ノ年ホギ縄ヲ  
カケテホグカモ

〔子規全集 第一九卷〕五九八頁

明治三四年一月二〇日

子規の「墨汁一滴」開始。

格堂は長篇の論文を書くことは子規には絶  
対に不可能であると直感し、毎日少しずつ  
小切りにしてもよいから、「墨汁一滴」で

元義を評論することをねだる(赤木格堂

「平賀元義発見譚(二)「吉備びと」昭和三年

一月、「先師の晩年」『日本及日本人』

昭和三年九月)。

杉鮫太郎は「元義の歌を子規居士に知らし

め、翌年の「墨汁一滴」にすずめてその詳

細なる紹介を書かせた先生の功績」(「格堂

先生追憶」「合同俳句」「赤木格堂追悼号」

山陽新聞社 昭和三年六月)と述べる。

一月二五日

「墨汁一滴」を代筆。「可なり衰弱の劇しく  
なられて居た頃、鉄幹氏へ挑戦状を送られ  
た一事である。之は私が口授を代筆したも  
のです」(「先師の晩年」『日本及日本人』

昭和三年九月)。

二月二二日

「墨汁一滴」の中で、俳句の寄稿者の中で  
格堂と寒楼のみ選抜の比例が十分の一以上  
であることを述べる(『子規全集 第一二

卷〕一〇六頁〜一〇七頁)。

二月二三日

子規を左千夫が訪問した折に、平賀元義に  
ついて毎日書きたいということ話す(左  
千夫「根岸庵訪問の記」『俳星』二卷一号)。

二月二四日

「墨汁一滴」の中で平賀元義の作品を取り  
上げる(『子規全集 第一二卷』一〇八頁)。  
二月二六日まで一三回にわたって紹介。

二月二五日

「墨汁一滴」の中で、平賀元義の作品収集  
の貢献者として格堂の名を挙げる(『子規  
全集 第一二卷』一〇九頁)。

二月二六日

「墨汁一滴」の中で、格堂が収集した平賀  
元義の作品は、短歌二百首長歌十余首であ  
ることを述べる(『子規全集 第一二卷』

一一〇頁)。

七月二七日

格堂、子規を訪問する(七月一九日付長塚  
節宛左千夫書簡)。(『子規全集 第二二卷』  
四七三頁)。

九月

毎夜、暁星学校に通学し、フランス語を学  
ぶ(「格堂先生の略歴」『俳星』昭和二四年  
二月 三頁)。

九月二〇日

「仰臥漫録」に「『俳星』ヲ見ル」とあり、  
格堂選天の句を挙げ、面白い句だが、「格  
堂未ダ俳句ノ品格トイフコトヲ知ラズト見  
エタリ 但彼ノ作ル所」「遙カニ俗流ノ上  
ニ出ヅ 侮ルベカラズ」とある。

これに続き、露月の選句眼のないことを批  
判(『子規全集 第一二卷』四二七頁)。

十二月初め

この頃、左千夫・秀真・麓・鼠骨・虚子・  
碧梧桐等と共に毎日交替で侍し、子規の病  
苦を慰藉する(『子規全集 第二二卷』四

明治三四年暮れ

九二頁。

子規に呼ばれ、言葉柔かに、(日本)週報の募集句代選のことを囑される。「虚子にても碧梧桐にてもいけないのだから、是非君にやつて貰ひたい」と頼まれ、承諾。子規一閱の上、新聞社に届けられた(「先師の晩年」「日本及日本人」昭和三年九月)。子規庵に「碧巖録」を持参する(「子規全集 第二二卷」四九六頁)。

明治三五年一月一日

一月二八日

子規から「碧巖録」が面白かったと、訪ねた時に語られる。「馬鹿野郎糞野郎」の偈を、唐紙に書いて見せられる(格堂「忘れられぬ御慶」「洪柿」大正七年一月)。「子規全集 第二二卷」四九六頁)。

子規を訪ねる(「子規全集 第二二卷」四九七頁)。

この頃子規の相続人と噂され、有難迷惑を感じていた。

三月

「ホトトギス」の「俳諧評判記」(同人数名)に「格堂はいつでも同じやうな句を出してこまる」「露月は医者四分俳諧六分。格堂は法学生三分五厘俳諧師三分五厘歌よみ三分。虚子は俳諧師四分七厘商売人五分三厘」という批判文が載る。

四月

五月

\*「ホトトギス」の「子規子断片」の中で、子規は次のように述べている。

人は年と共に感じる趣味が違ってくるもので、句を見る標準も変化しており、虚子・碧梧桐とも趣味が一致しない。こうなるとお互いに派を立てないと、納まらないのではないか。このことは憂うべきことか、却って面白いことなのかからないが、もう少ししたら決着が着くだろう。(碧梧桐記)

「ホトトギス」の「病床苦語」の中で子規は次のように述べている。碧梧桐の句はいつも幾らかずつ変化している。その変化は善い事も悪い事もあり、その弊害は理屈的な研究がなされていない点である。虚子は商売に身が入っていないという評判が聞かれ、反省すべき。俳句は鋳型の中に安定していない。この点が善いとも悪いとも判じかねる。露月の句は未だ完全に悟っていない。時として極めて幼稚な句を選んでいる事がある。進歩的な研究の精神が必要である。青々の句はしっかりと書いて縦横自在であるが、時としてあまり自己の好む処に偏してへんてこな句を選ぶ。

格堂の句は旨い事は実に旨いものであるが、其句法が一本筋であるだけに幾らか変化に乏しい処がある。

子規を訪ねる(「子規全集 第二二卷」五一頁)。

これ以前から子規の代選をしていることに

六月四日

七月

早稲田大学政治科を卒業。二四日に卒業祝いとして左千夫・蕨真を誘って松島に遊び、さらに単身青森・秋田・酒田・新潟・長野と日本海岸を漫遊（「先師の晩年」）。  
 帰京。翌日根岸に行こうと思っている処へ、故郷から至急帰って来いという知らせに接し、子規には会わずに帰省（「先師の晩年」）。叔父の選挙違反嫌疑のため、大阪の控訴院へ行く。

八月五日

自分自身の廃嫡か相続かの問題でもめる（「先師の晩年」）。

九月

子規のことが気になっていたが、自分の将来を決める重大問題が眼前にあったため、上京の決意が鈍った。左千夫からの便りによって子規の消息を知り、苛立つのみ（「先師の晩年」）。

九月一九日

九月一七日付の左千夫の手紙が到着。上京

九月二二日

の準備をするが、家庭の事情により動けない。上京する従弟に見舞いの品を託した（「先師の晩年」）。  
 子規はこの日の朝に逝去。  
 朝、子規の訃報を知らせた虚子による筆の葉書が届いた。ほとんど卒倒せんばかりで、なぜ電報で知らせてくれなかったのかと腹を立てた。

この日、子規の葬式が行われた。  
 左千夫へあてて、怨言の山を述べて俄かに上京はせぬと手紙を書く。怨めしく、日々泣き暮らす（「先師の晩年」）。

追悼の歌（当時は発表はしなかった）

其夜いねがたくてよめる歌

都なる今日のはぶりにかりがねの一人  
 おくれて音のみし泣かゆ  
 この他七首。

九月二六日

二四日付の左千夫から長い手紙が届く。私電を打とうとしたが、小串には電報取扱所がない。そこで葉書を出したということ、従弟の持参した見舞いの品を霊前に捧げたこと、皆格堂が気の毒だといっていることなどが書かれている。これを読み、不平も和らぎ、諦めも着いた（「先師の晩年」）。

\* 小串 電信開始 明治三五年二月、

郵便局 明治三七年

一二月

電話開通 明治四三年

十月

(小磯昇「小串村誌  
稿」昭和五九年四月 七六頁)

郷里を出発、再び上京(「格堂先生の略歴」  
「俳星」明治二四年二月 三頁)。廃嫡か否  
かの決着がつかぬうちに断然夜抜けをして  
大龍寺の子規の墓に参る(「先師の晩年」  
一九頁)。

明治三十七年

八月

九州日報の主筆となる。  
帰郷し正嫡相続人として宗家の主となる。  
(「格堂先生の略歴」「俳星」明治二四年二  
月 三頁)

明治四一年三月

明治四三年

大正二年

大正六年

大正一一年

昭和七年

昭和二一年

昭和二一年

「青年日本」発刊(「格堂先生の略歴」)。  
代議士となる(大正八年議会議解散)(「格堂  
先生の略歴」)。  
村長となる(「格堂先生の略歴」)。  
学務委員となる(「格堂先生の略歴」)。  
小串農地委員となり、死ぬ迄務める  
(「格堂先生の略歴」)。  
最後の句  
冬枯や顔の尖りも日に険し  
(「格堂先生の略歴」)。

昭和二十三年十二月三日午後三時

葬儀を神式にて行う(「格堂先生の  
略歴」)。

二 子規と格堂の関係

明治十二年七月二十七日生まれの格堂は、子規とは十二歳違いであ  
る。児島郡小串村の名門赤木家の四男として生まれた。三人の兄が

次々と夭折し、格堂は正嫡の位置にあった。父が後妻をもらい、その  
間に男子をもうけたために、後に後継者問題が起こり、子規の臨終に  
格堂が立ち合えないという状況となる。

ところで、格堂の父篤太郎はインテリで、新聞「日本」は創刊以来  
の愛読者であった。これを読んでいた格堂は、子規の率いる日本派の  
俳句に少年の頃から親しんでいたという。

子規の俳句との出会いは、格堂がまだ岡山小串村に住んでいた少年  
の頃にまで遡るのである。

明治二十九年六月に上京し、九月に早稲田専門学校英語専修科に入  
学している。この年の七月五日の新聞「日本」に、

覗かんとすれば傾く日傘かな

の句が「格堂」の俳号で掲載されている。

続いて、同年の七月十二日の「日本」には、

簑を着て筒を掘る男かな 格堂

の句が見られる。

上京した明治二十九年に、子規の選を新聞「日本」の俳壇において

受けるようになった。

しかし、この後しばらく格堂の名前は見られず、新聞「日本」に再  
び登場するのは、明治三十一年十二月十一日である。これは、明治三  
十年に早稲田専門学校英語専修科を卒業した後、文学部英語学科に入  
学、さらに、明治三十一年には英語政治科に転学していることから、  
試験勉強に没頭し、俳句を作らなかつたためと考えられる。

明治三十一年十一月号の「ホトトギス」には、選者の内藤鳴雪に、

罪を得て箱根を駕の寒さ哉 格堂

が三等に選ばれている(募集俳句 題「駕」)。その後継して他の選  
者の選に入選し、新聞「日本」にも前述のように明治三十一年十二月  
十一日から継続して子規の選に入選しているため、格堂の本格的な句  
作活動は、明治三十一年に始まったといえる。その活動の場は、新聞  
「日本」の俳壇と「ホトトギス」であり、子規との文芸的なつながり

も、本格的にはこの年に始まったといえる。

子規の執筆した「明治三十一年の俳句界」(「ホトトギス」明治三十二年一月)には、各地俳人分布の表の「東京」の欄に「格堂」の名が見られ(附十七頁)、投句者の中に赤木格堂という人物がいることに、子規は目を留めていた。ただし、「昨年<sup>三三</sup>に在りて著き進歩を現したる者、東京に五城あり、越後に香墨あり、大阪に青々あり」(附十六頁)とあるのみで、特記はされていない。

活躍が目ざましいものになるのは、明治三十二年からである。新聞「日本」には前年からの勢いで継続して投句し、三月には初めて「ホトトギス」の子規の選に、次の句が入っている。

招く手の五階の上に霞みけり 格堂

四月二十五日には、虚子庵例会に初めて参加。その後、継続して明治三十五年五月号まで子規庵や虚子庵で行われた句会の一部を紹介した「東京俳句界」に、格堂の名前が見られる。

明治三十二年五月に、初めて子規を根岸の病床に訪ねる(「格堂先生の略歴」「俳星」和二十四年二月 三頁)。岡長平氏の「赤木亀一」(発行所不明 昭和三十七年六月)によると、「東京専門学校今の早稲田大学入学のために東上すると、すぐ、下谷根岸の家に子規を訪ねた」(二頁)とあるが、格堂自身

「私は十八歳から二十四歳迄、満六ヶ年早稲田大学に居りましたが、其中の四年間は、休日毎に根岸へ通うて、病床の先生から親しく薫陶を蒙りました」(「先師の晩年」「日本及日本人」昭和三年九月 五頁)

と述べていることから、明治三十二年に子規に初めて会ったとする「格堂先生の略歴」の方が正しいと考えられる。

明治三十二年に、直接子規の指導を受け始め、ますます句作に熱の入ったことが、句会への参加、新聞「日本」への熱心な投句といった行動によく表れている。

この句作熱は、子規が明治三十二年に短歌の革新に乗り出したこと

により、短歌創作への意欲にもつながっていく。

明治三十二年九月三日、根岸子規庵第三回目の歌会から、熱心に出席している。<sup>三三</sup>

明治三十三年一月号の「ホトトギス」の「明治三十二年の俳句界」には、「新に三十二年中に頭角を露したる者は東京に於て潮音、格堂、三子、狐雁、竹子、道三、紫人、抱琴、牛歩の数子」(附二十二頁)とあり、いよいよ才能が子規に認められていたことが指摘できる。

四月二十九日に格堂を訪れて、伊藤左千夫のことを話題にすると、急に思い立って左千夫の家を訪問することにする。あいにく左千夫は不在であったため、格堂とたまたま子規庵を訪れた香取秀真とともに、亀戸天神に詣で、藤の花などを見学し、歌に詠む。子規にとつてはこの年初めての外出であった。ほとんど病臥の状態の子規を、休日ごとに見舞っていた格堂は、たまたまこのように、子規とともに吟行する機会を得たのである。同じ情景を見て、どの部分をいかに表現するかという写生による俳句や短歌の作り方を、子規晩年の弟子ではあっても、学ぶ機会があったことは、格堂にとつて幸せなことであった。

さて、格堂自身の才能と熱意、始終子規の元に居て直接子規の指導を得ることのできた幸運により、格堂の実力は伸びていった。明治三十三年四月三十日の「日本」の「第三回募集短歌に就きて」の中で、子規は「選抜の比例の多きを挙げれば岡麓氏(東京)の歌三十首にして十六首を抜ける、(中略)格堂氏(東京)の歌三十首にして十五首を抜けるが如き其最なる者なり」と述べ、格堂の安定した作歌力を評価している。

当時、短歌革新に乗り出していた子規は、自派の勢力を広めるために、新聞「日本」を中心として、漸次他の新聞や雑誌の歌壇を占領し、形勢がよければ「ホトトギス」のような機関雑誌を発刊しようと考えていたようである。その第一歩として、格堂に「国力」や「大帝国」の歌壇を委ねた。<sup>三三</sup>

明治三十三年六月十二日付 赤木亀一宛葉書には、次のように歌の

形式で「国力」に発表する短歌について記している。

国力ノ歌ノ事ニ就キ話アリ学校学課ヒマナ時ニ来

国力ニ歌ヲ出ストテオノガ歌バカリナ出シソ歌ハヨクトモ

「俳星」(明治三十三年八月 六号)には、「国力」の選者は、「俳句・短歌共格堂」(二九頁)とある。選者の権限を使い過ぎて、自分の短歌作品をたくさん発表したことを、子規に注意されたようである。

同年六月二十一日付、子規の格堂宛葉書に「明二十一日若シ御閑ナラバ募集歌ノ清書ニ御出掛ケ被下マジクヤ」とある(『子規全集 第十九卷』五二〇頁)。子規の晩年に、一週間に一度はその病床を訪れたという格堂であったため、かえって彼に宛てられた子規の書簡等は数少なく、その内容も前掲の歌やこのような用件のみのもが見られる程度である。

さまざまな込み入った話や人生観などは、格堂が子規を訪ねた折に、直接話して聞かせたことは、格堂の「先師の晩年」(前出)や「忘れられぬ御慶」(『洪柿』大正七年一月)、「子規夜話」(『洪柿』大正七年二月、大正八年二月、三月、四月、大正九年二月、三月、四月、五月)等から明らかである。<sup>注四</sup>

同年八月には、格堂と子規の関係を有名にした、平賀元義の発見という出来事があった。

八月に岡山に帰郷した格堂は、根岸短歌会同人の新免一五坊から羽生永明執筆「恋の平賀元義」が山陽新報に掲載されていることを知らされ、新聞の切り抜きと次のような手紙を子規に送った(「平賀元義発見譚」(一)「吉備びと」昭和三年十月)。

「どうです、驚いたでせう、遺詠は大分あるらしいから、明日から一生懸命集めます。早く新聞で発表して下さい。さうすれば歌を探しやすいから」

これに対し、子規の格堂に宛てた手紙には、

「前略」病床ニ君ノ手紙ヲ読ム 元義ノ歌ハ不思議ノコト也

骨折リテ某歌ヲ集メ玉ヘ 是非新聞ニ出シタシ」

とあり、次の二首が記されていた。

上ニシテ田安宗武下ニシテ平賀元義歌ヨミ二人

血ヲハキシ病ノ床ノツレハ 二元義ノ歌ヨメバウレシモ

このようなきっかけで、子規は平賀元義の歌に目を留め、それが後に元義の歌壇における再評価につながっていくのであるが、詳細は別稿に譲る。

この年の九月には、石井露月主宰の「俳星」を読んだ感想として、「仰臥漫録」(九月二十日 『子規全集 第十一卷』四二七頁)に次のように記している。

「前略」格堂未ダ俳句ノ品格トイフコトヲ知ラズト見エタリ

但彼ノ作ル所(中略)遙ニ俗流ノ上ニ出ツ 毎ルベカラス」

このような格堂への評価に対し、主宰の露月の選と作品については、次のような厳しいものである。

「コレ位初心ナ句ヲ露月ハ得見ワケザルニヤ 露月モト鈍根、

長ク工夫シテ漸ク一條ノ活路ヲ得タル者シカモコ、ニ多少上慢ノ

心起リテ復一段進歩ヲ見ズ 平凡ノ趣微細ノ趣ハ未ダ全ク解セザ

ルガ如シ 猶三折ヲ要ス」

格堂の方も全面的な賞賛ではないが、露月への厳しい批評に比べると、大きくその才能を認められていることが窺われる。

このような経過があった明治三十四年の暮れに、「日本附録週報」の募集句の代選を嘱されることとなる。「虚子にても碧梧桐にてもいけないのだから、是非君にやつて貰ひたい」と頼まれて、承諾。子規一閱の上、新聞社に届けられた。<sup>注五</sup>

ところが、翌年の明治三十五年一月には、子規の相続人と噂され、有難迷惑を感じるようになる。「ホトトギス」三月号の「俳諧評判記」には、「格堂はいつも同じやうな句を出してこまる」「格堂は法学三分五厘俳諧師三分五厘歌よみ三分」といった批評が載った。これに対する格堂の感想は見られないが、不快に感じたことであろう。

年若い格堂が重んじられていることへの嫉妬や不満、「ホトトギス」

の相続人が格堂になるのではないかという不安から、さまざまな噂がささやかれ、それが格堂の耳にも入ってくる。同年六月四日、悪い噂が父親の耳に入れば廃嫡される。それを恐れて、「日本附録週報」代選の辞退を、虚子に取り次いでもらって許可を得ている。実家の複雑な事情を打ち明けられなかったために、子規には嫌な皮肉を連発された。「先師の晩年」「日本及日本人」昭和三年九月。

七月に早稲田大学政治科を卒業。二十四日に卒業祝いとして、松島・青森・秋田・酒田・新潟・長野と日本海岸を漫遊。八月五日に帰京。翌日根岸に行こうと思っていると、故郷から至急帰って来いとの知らせを受け、子規には会わずに帰省。

週に一度は根岸に通い、子規の看護に他の弟子とともにあたっていたが、この帰省以後再び子規に会えることはなかった。このあたりの経緯については、年譜に挙げており「先師の晩年」に詳しい。異母弟が家督を相続するか、格堂が相続するかという問題でもめており、子規の病状を気にしつつも、上京の決意が鈍っていたのである。九月十七日付の左千夫の手紙が、子規の亡くなった九月十九日に到着。

九月二十一日に、子規の訃報を知らせた虚子による筆の葉書が届き、卒倒せんばかりに驚いた。格堂の実家のある小串には、当時電報取扱所がなく、電報で知らせることができなかったのである。

子規の最晩年に、どの弟子よりも身近に子規の傍に付き添っていた格堂が、子規の臨終に立ち会えなかった。格堂がいかに無念であったかは、容易に推察できる。

十月、廃嫡か否かの決着がつかぬうちに夜抜けをして、東京の大龍寺にある子規の墓に参った。そこでの様子を「先師の晩年」(十九頁)の中で、次のように回想している。

「独り墓前に立ちて茫然自失、余りの急変に呆れて涙も出ません。「先生、私は最う俳句も歌も作りません、之からは一生懸命勉強して外交官になります。先生はなぜこんな所へ来られたので

す。こゝは余りに寂しくはないですか」と思はず声を放ちました。伯牙の断琴に比するは僭越ですが、心は同じく殉死した積りです。孤影悄然として竹陰を帰り行く私を、寺の坊さんは、気狂ひと思つたかも知れませんか」

そして、子規追悼号の「ホトトギス」(十二月号)に、追悼句

秋風に悲しむ庭に立ちながら 格堂

を発表した後、一年間ほど文壇から遠ざかる。このことが、のちに辞典類に「子規没後俳壇を退いた」といった紹介のされる一因となったと考えられる。

おわりに

格堂が子規に認められ、子規生前中に活躍した期間は明治三十二年から同三十五年の前半までで、非常に短いといつてよい。しかし、この短期間のうちに才能を認められ、「日本附録週報」の代選まで任される程の信用を得たのであった。

のちに、「ホトトギス」や「俳星」、「洪柿」といった俳誌にかかわっていく格堂であるが、この短いながらも親しく深い子規との交流が、他の「ホトトギス」の俳人に認められていたからこそ、そのことが可能となったと考えられる。

(注)

- (一) 略歴を俳句・短歌の作品の一部を紹介したものに岡長平「赤木亀一」(出版社不明、昭和三十七年八月)がある。室岡和子「子規山脈の人々」(花神社 一九八五年六月)には、周辺歌人の一人として格堂が取り上げられている。最近の研究では、拙著「子規をめぐる岡山の俳人たち―赤木格堂を中心に―」(俳句史研究第8号)大阪俳句史研究会 平成十三年八月)が見られる程度で

ある。

(二) 「平賀元義発見譚(一)」「吉備びと」昭和三年十月)には、第一回目の歌会から出席したと述べてあるが、歌稿には第三回から出たとある。

(三) 赤木格堂「先師の晩年」(「日本及日本人」昭和三年九月 十  
三頁)参照。「俳壇」については「俳星」(明治三十三年八月)に  
「大帝国」の受持ちは佐藤紅緑(二九頁)とある。「大帝国」の  
歌壇は格堂、俳壇は紅緑に任されたのであろう。

(四) たとえば「子規夜話」の「五 手紙の事」では、「手紙位よく  
人の性格を暴露するものはない(後略)」、「九 一文字不添一字不  
削」では、「選者の顔色を見ずに一生懸命作つて居れば何時とは  
なしに他人の追躡できぬ自己の新境地が開けて来る」と子規が語  
つたと回想している。

(五) 子規がなぜ格堂に頼んだかという点については、「解釈」(第四  
十八卷 第一・二号)にて明らかにした。

(六) 高木蒼梧編『俳諧人名辞典』(巖南堂書店 昭和三十五年六月)、  
松井利彦編『俳句辞典 近代 増補版』(桜楓社 昭和五十七年  
五月)、『岡山県歴史人物事典』(山陽新聞社 平成六年十月)、  
『俳文学大辞典』(角川書店 平成七年十月) など参照。

二〇〇一年 十月三十一日受付

二〇〇一年十二月二十五日受理